



第1期

閑談『繡像小説』

澤田 瑞 穂



第9期

清末時期文芸雑誌類——『新小説』『繡像小説』『月月小説』『小説林』など数種が影印市販されるとの予告が中国関係の書店から届いてより日が経ったが、まだ現物には接していないので、果して完全な影印なのか、それとも何かの手が加えられているのか、現物を見るまでは事前の評価はできない。しかし、あれだけ多量の、しかも稀見の雑誌が一挙に影印されるとは、この方面の研究者にとっては朗報である。四人組退治後の中国が、学問の方面でも文化大革命ならぬ文化大復興に熱意を燃やしているさまを窺わせるに足る快挙であろう。

どの雑誌も資料として貴重であるが、とりわけ『新小説』と『繡像小説』とは清末文芸史上その地位は不動であり、その価値はすこぶる高い。このうち、『繡像小説』全72期揃いの原本はわたしも秘蔵している。上海図書館本影印の予告が出たのを機に、わたしがこの雑誌を入手した前後の状況を書くようにと、『清末小説研究』の樽本主編から要請があった。解説や考証ではしんどいが、気楽な回憶記ならば書いてもよいと引請けた。以下がそのとりとめもない閑談である。

往年の北京は、中国文化に関する諸学問の研究者にとって、資料蒐集の一大根拠地であった。もとより現地に生活して異邦の風物に接すること自体が貴重な体験であり、心の内なる資料の集積ではあるが、やはりその実証としての外なる資料をも併せて確保する必要があった。その外なる資料の筆頭が書籍類であったことは、おそらく、どの分野の研究者にも共通していたであろう。

わたしが初めて北京の地を踏んだのは昭和15年2月であった。日中戦争は続

いており、時局は容易ならざるものがあったが、それでも北京はまだ古都らしい余裕と風格とを保っていた。

ところで、その2月の某日に、前門外の旧北京車站に降り立ったわたしは、出迎えの友人に案内されて、早速に出かけたのが東安市場内の書店と、東四牌樓の北にあった隆福寺街の書肆、特にその中の一軒である宝文書局という店であった。これは友人の行きつけの店であり、番頭の李殿臣は当時まだ30歳代であったと思うが、気さくで親切誠実な人柄であり、それ以来ずっと懇意になり、わたしの蒐書にも終始便宜を図ってくれた。商売だから当然だといえばそれまでだが、研究者にとって懇意な書店にまさる有能な助手はないものである。

わたしの研究分野は文学であった。だが文学といっても、古代から現代まで、あまりにも広範囲に過ぎ、とても全面的に対応できるものではない。そこで、集める書物の性質を考え、第一に、日本内地の書店でも容易に入手できると予想される古典類は見送って、内地の書店に出ることは減多にあるまいと思われるものを優先することにした。その結果、中国の書店では、商品としては一般に価値が低いと見なされる雑書類から先に手を出すことになった。書店に入ると、架上の堂々たる帙入り本よりも、片隅に裸のまま積まれてあるガラクタ本から物色するという変則の捜書法であった。その意味では、わたしは書店にとっては、あまり上客ではなかったかも知れない。

眼をつける書物の種類は、明清の小説・戯曲・散曲類をはじめ、俗謡や鼓詞・弾詞などの俗文学作品。それから宝巻を目玉とする仏教・道教・民間教門の経巻および勸善書の類。新しいところでは民国以降に刊行された白話詩集・小品文集および文芸評論集など。現代小説作品や新出の通俗読物まで集めては切りがないので、特殊なもののはかは概して敬遠した。それから中国民俗学方面の単行本や雑誌、これも重要な研究課題だったから、眼につくかぎりは努めて集めた。

文学書中の蒐集目標の主なる一項目に清末小説があった。これについては渡燕以前の昭和12年ころに東京神田の書店で求めた阿英の『晚清小説史』、例の黄色の表紙に黒龍の図を配した商務印書館の初版本を第一の道案内にして捜した。しかし清末物は隆福寺街や琉璃廠などの古い刻本を扱う書店にはあまり現

われず、主として東安市場や西単商場の古本屋、および路傍に蓆や戸板を敷いて雑書を売る露店で、埃にまみれたのを拾いあげた。旧暦新年の海王村公園一帯の古本市、いわゆる廠甸などは絶好の餌場であった。

琉璃廠にせよ隆福寺街にせよ、およそ一戸を構えて看板を掲げるほどの書店は、書架を並べる表側の部屋とは別に、さらに卓や椅子などを備えた奥の一室があって、主として顧客との応接にあて、またその店の特別貴重書を貯える書筒などもおき、あるいは入手したばかりで未整理の本なども土間に積んであることが多かった。わが『繡像小説』も、昭和15年だったかその翌年だったか年月は忘れたが、宝文書局のその奥の一室で見つけたもので、全72期分の首尾はそろっていたが、まだ帙もない裸のまま土間に置かれてあった。

これよりさき、番頭の李君は、わたしの蒐書傾向を呑みこんでいて、わたしの好みに合いそうなものを取っておいてくれた。たとえば、清末から民初にかけての刻本または写本の小型唱本および劇本類、今に至るまで総冊数は算えていないが、ざっと数百点に及ぶコレクションを一括して購入し、これを収納する箱型の帙6個を作らせた。わたしはそれに『清代俗曲彙編』の題簽を附した。ついでに前門外打磨廠は学古堂印行の新しい唱本・劇本類をも李君を通じて一括購入し、これを2個の帙に納め、こちらは『^{現代}北京俗曲彙函』と題した。

こんな要領で、宝文書局では通常の版本古籍のほか、毛色の変ったものまで集めることができたのは、李君が北京市内はもとより、遠く蘇州や上海にまで出張して、めばしいものを仕入れてきてくれたからである。北京が蒐書の根拠地だといったのはその意味である。『繡像小説』も、おそらく上海あたりで仕入れたものだったと思われる。

このほか『紅雑誌』や『紫羅蘭』など、民国年代の『礼拝六』系統の小型雑誌の揃いも宝文書局で見かけたが、当時のわたしは、まだいわゆる鴛鴦蝴蝶派のものにまで手をのばす余裕もなかったもので、これらは購入を見合せた。東安市場でも、林訳小説を多く含む商務印書館の「説部叢書」のかなり数のそろったものや、単行本では徐枕亜の『玉梨魂』なども時おり見かけたが、あまり手を出さなかったのは、とりあえず清末物をといることを当面の目標にしていたからであった。

かくて昭和17年の秋に帰国した。在燕3年の間に集めた書物は、大型夾板の『淵鑑類函』など冊数のかさばるものや、日本の新刊書など、その大半は売らなり寄贈するなりして整理し、必要なものはすべて小包にして、出発に先立ち内地に郵送した。その荷造りは李君が一手に引受けてくれ、洋車7台か8台かに積んで郵便局に運んだ。『繡像小説』も勿論その中にあった。

帰国はしたものの、故国には暗雲が垂れこめていた。戦局は悪化する一方で、生活は苦しく、集めた資料の整理に没頭できる状態ではなかった。わたしは再び北京に渡る決意を固め、かの地で当面必要とするであろうと思われる若干の書物や資料を蒲団包みの中に入れて送り、昭和19年6月に再度の渡燕をした。しかし時局は前回とは異って急激に変化していた。翌20年になると、もう戦局は断末魔に迫って、在留邦人にも不安と焦慮の色が濃くなった。

東安市場の古本屋にも異変が生じていた。これまで、ついぞ見かけることのなかった皮革装金文字の豪華な洋書の全集類がズラリと店頭に並べられていた。これは近い将来を見越した在住の邦人が、帰国に先立って蔵書を整理したものらしかった。また同時に珍しい清末の文献も、かなり数多く店頭で見かけるようになった。これまた同様の事情からきた一時の現象だったようだ。先の見えないわたしは、喜んで買い集めておいたが、これは遂に内地に持ち帰ることはできないで終わった。今となっては、せめて入手した分だけの目録や提要を作っておけばよかったと悔まれるが、たとえ作っても、おそらくそのメモさえ持ち帰ることは困難だったに違いない。

やがて昭和20年8月に敗戦を迎え、翌年の早春には無一物同然で妻子だけを携えて帰国した。帰国者は手荷物の量にも限度があり、かつ所蔵の書籍はもとより、原稿や写真まで検閲没収されるという規制があったから、一切の資料は涙を吞んで売却するか、もしくは乗船直前の土壇場で破棄せざるを得なかった。邦人の中には、遠い将来を待んで、中国の知友に寄託した人もあったらしいが、それではいつまでも念が遣って諦めきれない。わたしの場合は、自分の意志で破棄焼却することにより、愛惜の未練を一挙に断滅しようとした絶体絶命の処置でもあった。今日からでは是非の論もあろうが、当時の断崖に立たされたものにとっては、この二者択一の途しかなかったのである。

帰国以後、艱苦に満ちた戦後の生活を経て、昭和32年に天理大学に赴任し、爾後の十数年間に、やや落ち着いて往昔の資料類の再点検に従事した。『繡像小説』もその対象ではあったが、清末小説よりも先に整理しなければならない別の分野があったから、清末関係はほんの一部分、たとえば李伯元作『活地獄』の初出原文や挿図を使用したくらいで、せいぜい架蔵の書として時おりその健在を確かめる程度であった。

この李伯元主編の小説専門誌のことは、早くも昭和10年4月5日発行の『中国文学月報』第2号に「文芸雑誌の変遷」の第1回分として、創刊号の表紙図案の写真入りで簡潔に紹介されているから、わたしより数年も前に、すでに日本の研究家によって将来せられていたのである。これについて、某年に天理を訪れた早稲田大学の小野忍教授に、本書のその後の消息を尋ねたところ、それは故竹内好氏の旧蔵に係るものであったが、知人の誰かがその中の1冊だけを抜いて借り出していったきり返らず、その1冊を失ったまま、遺憾ながら完本ではなくなったとのことだった。これはまた愛書家にとっては^{ああむじよう}臆無情ともいふべき痛恨事ではある。古来、図書の散佚は、こうした蟻穴の漏水一滴より起る。蔵書の貸借ということについて、学人として心すべき事例ではなかるうか。

やがて予告どおり影印本が世に流布してくれれば、原本収蔵者としての心の負担は多少は軽くなるうというものだが、しかし原本はやはり原本であって、水火蟲鼠の敵は防がなければならぬし、さらに巧言令色で近づく別の敵による被害も甚大と覚悟せよ。さればとて、どこかの図書館にでも寄贈すれば万事安心かといえ、必ずしもそうではない。本文や繡像をナイフで切り取る痴漢を想像して、待てよ、それも危^{やば}いぞという気になる。被害妄想・懊惱煩悶・輾轉反側……。ちと大袈裟だが、これぞ書を愛するものにとっての天堂地獄であるからには、徒らに往時を回想して、ああ、昔の北京はよかったなあ、などと詠嘆ばかりもしておれないわけである。

(さわだ みずほ)